福崎町文化

第42号　令和８年３月５日　兵庫県神崎郡福崎町福田176番地の１ 福崎町文化センター発行

国登録有形文化財
旧辻川郵便局

柳田國男「故郷七十年」
國男の小学校時代

北野区在住　埴岡　栄

『故郷七十年』で柳田國男は、「昌文小学校のことなど」、「辻川のみち」として子供の頃通った田原の昌文小学校時代のことを述べております。しかし、

・『故郷七十年』の記述だけでは実態を掴むのは難しい点

・今回明らかになったこと、明らかにしたいこと

をご紹介したいと思います。

「昌文小学校のことなど」

もっとも、私は五歳の時に辻川の小学校に上っているから、九歳で当時の田原にあった昌文小学校をすでに卒業し、北条の町に移って高等小学校へはいっていたわけだ。

ここで一寸そのころの小学校の思い出になるが、小学校は全国的にみな難しい漢字二つの校名をつけていた。田原が昌文、南田原が柔遠などの美名で呼ばれていた。明治十八年には、はじめて学校が新築された。それまでは寺を使っていたのが、その年に金を集めて新校舎を建設した。そこではじめての卒業式を盛大にやろうということになって、県令（知事）がその式典に臨んだ。森岡昌純という人だったが、それが私の褒状をもらった最初であり、県令閣下を見たはじめでもあった。

「辻川のみち」

辻川の南を岩尾川という綺麗な細い川が流れている。北条の方から来る所に橋があり、その橋は私の見ている間に石橋にかけ代えられたのでよく知っている。それは姫路から来る国道がついた時のことであった。その少し上流に岩尾神社というお宮がある。妙徳山の鎮守さんだったらしい。それに向って左の所に私らが通った昌文小学校があった。

柳田國男は、昌文小学校の校長として勤務していた長兄鼎の計らいで、明治十二年（一八七九）の春、数えの五歳で昌文小学校に入学して九歳で卒業し、北条の町に移って高等小学校に入ったと書いており、その小学校は、生野から姫路に向かう馬車道沿いの三木家を過ぎて、巌橋という新しい石橋が架かっていたが、岩尾川の上流には岩尾神社というお宮があり、「それに向って左の所に私らが通った昌文小学校があった。」と書いています。

しかし、巌橋から岩尾神社に向かって「左側」方向となると東三木家横の西田原字西廣岡九九八に出来た新昌文小学校の方向となりますが、学校が新設されたのは明治十六年（一八八三）七月でありますから皆と同じ十六年春の卒業ならまだ建設中でありましたし、通学するには巌橋を渡らず手前で曲がる事になるのです。

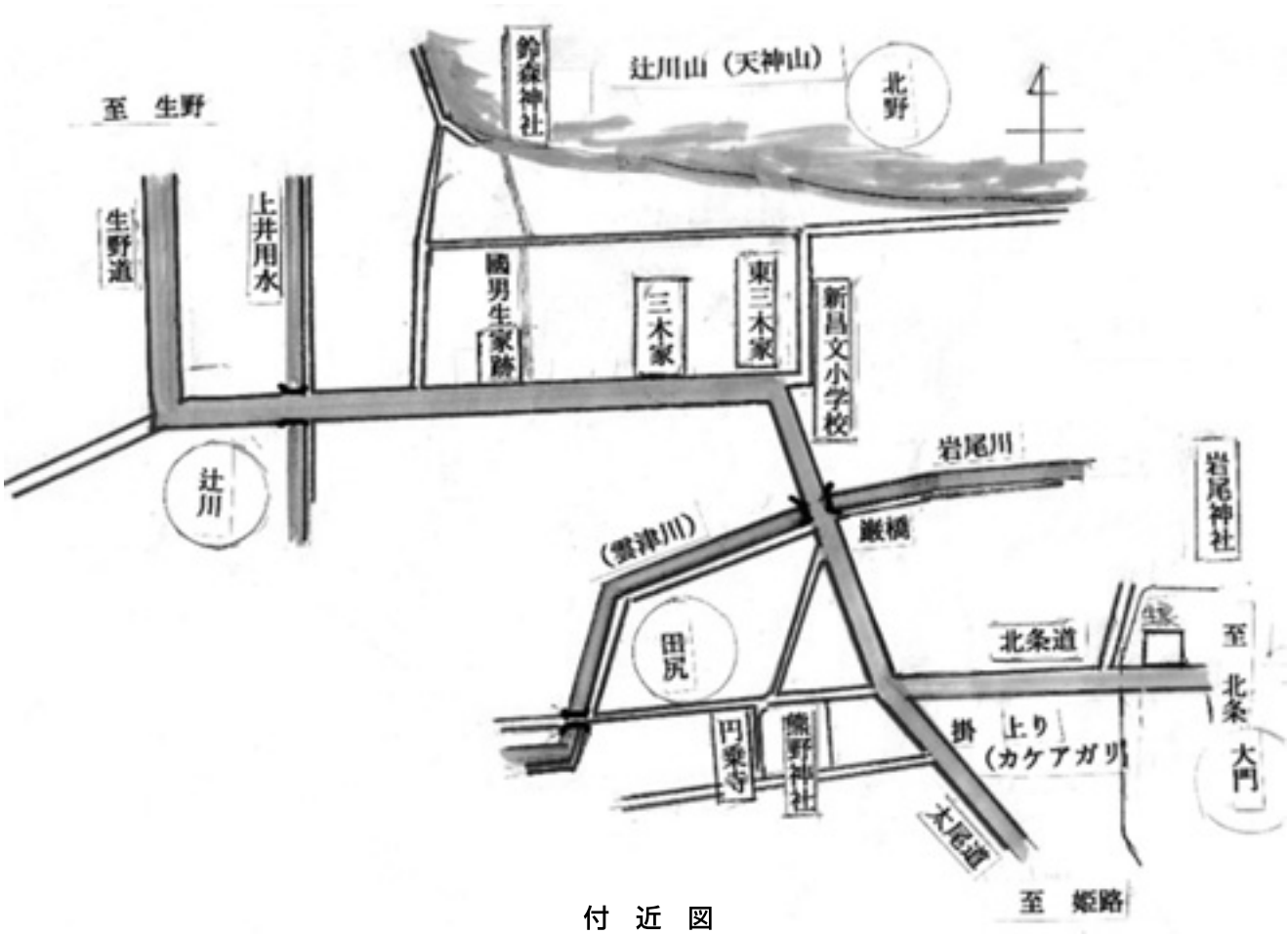
同じ辻川出身で北海道で財を築いた松岡源之助の伝記である『故松岡源之助翁追慕記』では、二歳年上であった松岡源之助が「やがて七歳、明治十二年四月、字田尻の円乗寺境内に有った昌文初等小学校え入学した。」「十一歳で芽出度卒業し、引続いて木村塾に通って普通学及び算数を補修した。」と書いております。

今、岩尾川（雲津川）に新しく架けられた巌橋に行ってみると、南側に馬車道と交わる様に川に沿った道があり、そばの家が建つ所には横道がありました。この小道を辿って行くと熊野神社の北側に出ることになりますが、そこは熊野神社横の円乗寺への道になります。

当時の少年達は巌橋を渡り、この細道を通って学校に通っていたと推察できますが、この円乗寺の昌文小学校を卒業したのであれば、巌橋から見て小学校は岩尾神社に向かって「右側」となります。

ところで國男が書いている通り、岩尾神社に向かって「左側」に学校があったのなら、皆より一年遅く明治十七年に卒業しなくては新校舎はありませんので卒業年度を検証する必要があると考え、巌橋付近の散策のあとに、辻川山にある「柳田國男・松岡家記念館」を訪れました。

そこでは現在展示はされていませんが、國男の幼時の証書や表彰状が保管されているとお聞きし、國男の表彰状や卒業証書を閲覧しました。



付　近　図

現在の「銀の馬車道」巌橋　付近

熊野神社（円乗寺側）出口

円乗寺（元昌文小学校）

「（明治十五年十月以降分）

明治十五年十月五日
初等小学校第一級卒業

右に熊野神社方向小道

正面山が岩尾神社

明治十六年四月
中等科第六級卒業

明治十六年九月
中等科第五級卒業

明治十六年九月
中等科第四級卒業
明治十七年四月
中等科第三級卒業
明治十七年十月
中等科第二級卒業
平民　松岡國男　當十一月九年三ヶ月
小学中等科卒業候事
村立　昌文小學校
明治十七年十一月二十四日」

岩尾神社に向かって「右側」の円乗寺にあった初等昌文小学校を明治十五年（一八八二）十月に早期卒業し（一般は十六年卒業）、中等科に進み、十六年（一八八三）七月からは「左側」に出来た新昌文小学校中等科に通い、翌十七年（一八八四）十一月に卒業し、十二月頃から北條小学校の高等科に通ったと思われます。

また「柳田國男・松岡家記念館」には國男の父松岡操の明徳小學校の教員任命書と辞職願も保管されておりました。任命書には

「松岡操
第九大區第三小區
明徳小學校二等
教員申付候事
但月給　金五圓
明治七年十月十五日
飾磨縣」

松岡操の自筆辞職願には

「小学校教員辞職願
私儀去十月以来明徳学校
教員被申付候所兎角疝痛
持病平癒仕兼候二付不得已
辞職支度此段奉懇願候以上
明治九年
一月十九日　第九大區
第一小區田尻村
明徳小学
二等教員
松岡操
（中略）
飾磨縣参事　岡崎真鶴殿」

と記載されております。

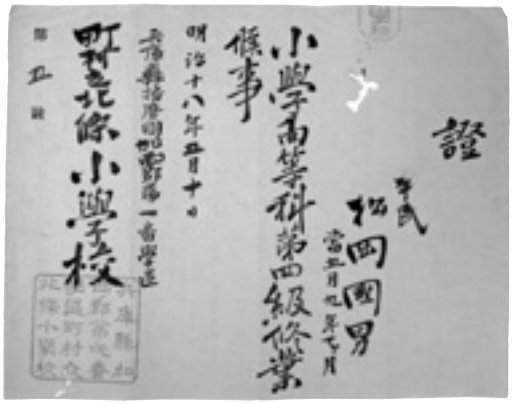
新　昌文小学校跡地

飾磨縣では明治五年六月より郡を大区とする「大区・小区制」を実施しており、任命書には明治七年当時の「区名、小学校名」として「第九大區第三小區明徳小學校」は辻川村、田尻村であり、明治九年の辞任願いに書かれた「第九大區第一小區田尻村明徳小學校」は田尻村に明徳小學校があった事を示しており、『故松岡源之助翁追慕記』の昌文小學校が円乗寺にあったと云う事を裏付ける貴重な資料でありました。

『福崎町史第二巻』には「辻川の昌文小学校を卒業（当時は四年制）すると、東に約八キロメートル隔てた隣町の北條小学校高等科に入学、二年間通学して卒業、県知事の表彰をうける成績であった。」と書いて

あり、修業証書の写真もありました。

「平民　松岡國男　當五月九年十ヶ月
小學校高等科第四級修業候事
明治十八年五月十日
町村立　北條小學校」



『福崎町史第二巻』より

『柳田国男八十八年史別巻（年譜上）』には、**「明治十六年三月、昌文小学校を卒業する。四月、北条町にある高等小学校に入学し、二里の道を歩いて通学する。明治十七年夏から秋、家が売り払われる。明治十八年五月十日北条小学校高等科第四級を卒業し知事から表彰を受ける。それまでは寺を使っていたが、その年にお金を集めて新校舎を建設し、そこで初めての卒業式をやろうとなり、県令はその式典に臨んだ。」**とあり、どちらも昌文小学校を四年で卒業し、明治十六年四月から北條小学校の高等科に入ったとしており、円乗寺にあった昌文小学校を卒業した後、昌文小学校中等科に通ったことは抜け落ちておりました。

しかし正しくは、國男は明治十二年（一八七九）数えの五歳で入学と書いておりますから、中等科を卒業した明治十七年（一八八四）十一月数えの九歳ではなく十歳（卒業証書は満年齢の九歳三ヶ月）で昌文小学校中等科を卒業したのです。

また、明治十八年（一八八五）五月高等科第四級を卒業した際、成績優秀で知事が式典に臨んで褒状をもらったとしておりますが、『故郷七十年』では、その頃國男は北条の高等小学校へはいっていたわけで、**「ここで一寸そのころの小学校の思い出になるが」**とわざわざ書きおいて、田原の昌文小学校時代の事を書いておりますのでそれまでは寺を使っていたが、お金を集めて小学校を建て、初めての卒業式を盛大にして県令を呼んだというのは昌文小学校の卒業式での出来事であり、明治十八年ではなく十七年のことと考えるべきです。

昌文小学校が円乗寺小学校から新校舎を建設し移転したのは明治十六年（一八八三）七月のことでしたから、國男が卒業した十七年（一八八四）十一月は初めての卒業式でありました。そしてこの時県令森岡昌純が式典に臨み國男は褒状をもらったと考えるのが自然です（但し県令の表彰状は見当たらないそうです）。

北條小学校が酒見寺から校舎を新設移転したのは明治十五年（一八八二）で國男の入学前のことであり、また県令の森岡昌純は、明治十八年（一八八五）四月七日に交代して農務省に転じて、十八年五月の式典には出席できなかったことになりますので、北條小学校での話ではなかったのです。

その頃茨城県の長兄鼎からの仕送り金を國男が怖い思いをしながら北条までの二里の道を歩いて取りに行くのが國男の役目でありましたが、國男が北條小学校高等科に入学した明治十七年の暮には松岡家は辻川の家を売って北条に移り住んだので、その役目も終わり、二里の道を二年間通学したという事もなかったと思われるのです。

売られた家は北条道沿いカケアガリ近くの大門にありましたが、昭和四九年現在の記念館横に移転保存されています。

我が家の向いにあった　かや葺きの生家
手前は移設後増築された瓦葺きの座敷
（昭和44年時　筆者撮影）

小学校教則綱領第二章第六条（明治十四年五月文部省通達）は高等科の学期を二箇年と定めていました。また明治十八年五月の高等科第四級修業時の國男は入学してまだ半年たらずであり卒業とするには早すぎる時期でした。その後もまだ通学していたのかも知れませんが、当時北条の辺りは國男の言うところの「日本における最後の大飢饉」が発生しており、また父も北條小学校の訓導であり薄給で多くの家族を養い兼ねた為だったのでしょうが、北条に移って一年足らずで、いつしかお寺の小僧話があったりしながらも、同年暮れには國男だけが辻川の大庄屋三木家に預けられる事になるのです。

三木家は蔵書家であったため、部屋に籠って乱読する生活を一年くらい過ごした事が後世に大いに役立つ事となりました。

九代目当主の三木拙二は明治六年（一八七三）生まれで郵便局長や村会議員を務めるなどした人物で、二歳年上でしたが國男とは竹馬の友として生涯に渡り親交を深めました。

その後辻川を離れた國男は明治二十年（一八八七）八月、次兄井上通泰に連れられ北条を後にし、長兄鼎が住んでいる茨城県布川に向かったのであります。

柳田國男新年表（数え年）

明治　八年（１８７５）	七月三十一日	飾磨縣神東郡辻川村で松岡家　父　操 母　たけ　の六男として誕生する
明治十二年（１８７９）	十月頃	五歳　辻川の昌文小学校入学
明治十五年（１８８２）	十月	八歳　円乗寺昌文小学校卒業
明治十六年（１８８３）	四月	九歳　昌文小学校中等科六級卒業
明治十六年（１８８３）	七月	九歳　昌文小学校中等科新校舎に移転
明治十七年（１８８４）	十一月	十歳　新昌文小学校卒業中等科卒業 （県令表彰を受ける）
明治十七年（１８８４）	十二月頃	十歳　自宅を売り払い家族で北条に移転
明治十七年（１８８４）	十二月又は十八年一月頃	十歳　北條小学校高等科入学
明治十七年（１８８４）	明治十八年	にかけて悲惨な飢餓を体験する
明治十八年（１８８５）	五月	十一歳　北條小学校高等科第四級修業
	時期不明	北條小学校高等科を卒業（「町史」＊疑問あり）
明治十八年（１８８５）	暮れ	十一歳　辻川の三木家に預けられる
明治十九年（１８８６）		一年位で三木家から北条の自宅に戻る
明治二十年（１８８７）	八月	十三歳　井上通泰（次兄）に付き添われ松岡鼎（長男）の住む茨城県の北相馬郡布川に移転する

注一　福崎町史第二巻

田原地区では明治六年二月に五つの小学校が出来ました。

明徳小学校　辻川　　辻川２３７
智泉小学校　大門　　薬師寺
金鶏小学校　西光寺　宝性院
柔遠小学校　長目　　勅使寺
田原小学校　西野　　西源寺

明徳小学校は同年五月東田原一四六番地に移転し、明治八年には又辻川二三七番地に復した。翌明治九年に五校が合併したうえで昌文小学校と改称した。

明治十三年に西田原一一九番地に移転したが（＊）、明治十六年七月に西田原字西廣岡九九八に新築移転し、明治二十一年四月昌文小学校を昌文尋常小学校と改称し、西田原村円乗寺にあるものを昌文簡易小学校と称したとある。

＊松岡操の教員退職届より昌文小学校は明治九年熊野神社横の円乗寺にあった可能性が出てきたが、明治十六年新昌文小学校に移るまで円乗寺にあったとすれば「明治十三年に西田原一一九番地に移転」は無かったのではないかと思う次第です。

注二　田原小学校１００周年記念誌「まなびの郷」

昌文小学校の前身は、円乗寺の寺子屋であると伝え聞いている人がある。しかし明らかにできなかった。との記載が有る。

又「卒業生」の欄に明治十六年として松岡國男、福渡鶴松、松岡源之助の三名だけを記載しております。

ただし松岡國男、福渡鶴松は明治十五年十月に卒業していたのである。

注三　「石橋の巌橋」

現在、辻川山麓の保存生家近くの河童池に移設保存されている。

注四　神東郡は、明治八年は飾磨縣であったので松岡國男が生まれたのは飾磨縣神東郡辻川村である。翌九年、兵庫縣となった。

同年、森岡昌純が兵庫県権令となり、明治十一年（一八七八）県令となる。明治十八年（一八八五）四月七日に交代し、農務省に転じたが即退任し、四月九日には共同運輸会社社長に就任した。

兵庫縣神東郡田原村となったのは明治二十二年のことである。

注五　「北條町志」

博文小学校は間もなく北條小学校と改称された。

明治十五年に工費三千餘圓を以て酒見寺裏に校舎を新築し初めての學校の形式を整えたのである。

同年小学校を初等中等高等の三階に區分することになったが、・・・・・

北條は第一学区となったわけである。

注六　小字「掛上がり」カケアガリ

「掛上がり」は馬車道から分かれた北条道沿いの北野地区の小字。松岡家が移築されたのは「掛上がり」隣の大門地区である。

参考文献

福崎町史　第二巻　福崎町史編集専門委員会　著
柳田国男八十八年史　小山清　著
まなびの郷　田原小学校記念誌
北條町志　加西市北条町　著
今、柳田国男を読む　石井正巳　著
民俗学のふるさと　辻川　辻川史編集委員会　著
柳田國男と福崎町　東播磨地域史懇話会　著
柳田國男を歩く　井出孫六　著
松岡源之助傳　松岡秀隆　著
故松岡源之助翁追慕記　真弓政久　著

名望家・三木拙二と日露戦後の農村問題

神戸大学大学院人文学研究科　出水清之助

はじめに

本稿は、三木家の九代当主・拙二（通精）の名望家としての活動を検討しつつ、その位置づけについて考察するものである。

三木家は、姫路藩主の新田開発の呼びかけに応じて明暦元年（一六五五）に神東郡・辻川に移住し、三代当主・善政の時代から近世を通じて村々を統括する大庄屋を務めた。また、明治初年には八代当主・承太郎（通済）が飾磨県の戸長等を歴任するなど、近代以降も地域社会の中心的な存在であった。同家の福崎町における政治的・文化的な影響力の大きさは知られており、現在も残る三木家住宅（西田原）からも、往時の有様をうかがうことができる。

しかしながら、こうした重要な役割を果たした三木家の中でも、近代において長らく当主をつとめた九代・拙二（一八七三～一九六一年）の動向については、大正期以降の農会への関与［深見二〇一一］を除けば、本格的な研究がなされていないというのが現状である。

そこで本稿では、拙二についての基礎的な研究として、「名望家」という視角から検討を加える。「名望家」は近代日本において、名声・財産・教養を兼ね備え、地域社会の形成・発展に大きな役割を果たした存在であるが、拙二もこうした名望家として評価できる人物であると思われる。例えば、当時の彼について評した文献によれば、「氏（拙二―筆者註）は郡内に於ける富豪にして、家世々農を以て業とし地方に於て名望最も高し、資性温厚篤実にして夙に農事の改良に志厚く、実践躬行常に郷党の先駆者たり」（多木製肥所編『日本農界偉人名鑑』多木製肥所、一九